



巻頭言

日本原子力研究所理事長 岡崎 俊雄



先端基礎研究センターが昨年設立以来10年を経過するに際し、まとめられた研究評価委員会（委員長：西澤潤一岩手県立大学長）の評価結果報告書の冒頭、次のように総括されている。

『先端基礎研究センターに植え付けられた、放射場科学、重元素科学及び基礎原子科学の原子力科学基礎研究の3本の木はこの10年の間にかっしりと根を張り、幹を太らせて年々新しい枝を増やして成長を続けてきた。そして今まで世に出ていなかった原子力に関わる全く新しい味覚の学術的成果を生み出し、自然の中に秘められたエネルギーの源の本体やその営みの可能性を人々に与え、またその成果から、新しい科学・技術の創生を促してきた』

同時に、日本原子力研究所にとっても、先端基礎研究センターの活動は、大強度陽子加速器（J-PARC）の進展を支え、また、東海研究所のみならず、高崎研究所、関西研究所等との連携を促し、国際的な研究拠点化へ大きな刺激を与えてきたことは高く評価される。

さて、日本原子力研究所は、来年には、核燃料サイクル開発機構と統合し、新法人として新たな出発を迎えることとなるが、新法人の設立に関し、文部科学省に設けられた原子力二法人統合準備会議は昨年9月の報告書において、新法人の基本理念として『原子力研究開発の国際的な中核的拠点の実現』を謳い、果たすべき役割については『新法人は原子力研究開発を総合的・一体的に実施する先端的な研究開発機関として、科学技術の水準の向上を図り、原子力の利用の高度化及び多様化の推進に貢献するという重要な役割を担っている』としている。

20世紀に生まれ育った原子力科学技術を、今世紀、真に私たち人類社会のものとするためにも、先端基礎研究センターで育てられた木が、新法人の中でどのように繁り、どのような花や果実を付けてゆくのかの期待は大きい。